

部活動での人間関係が部活動の継続と 日常生活スキル向上に及ぼす影響

野 中 一 成*

論文要旨

日本の現在の学校教育の中には授業や特別活動の他に、課外活動である部活動が存在する。部活動は、主に中学校・高等学校で行われており、運動部・文化部など様々な種類が存在する。部活動の参加は任意となっているが、現在でもほとんどの学校で部活動は行われており、学校内で行われる活動でありながら、通常の授業とは異なる特徴を多く持った活動となっている。第1に、部活動は自分の適性や興味・関心に基づきながら、自らの能力及び技能を磨く活動である。第2に、指導者（コーチ）の指示のもと、メンバーで協力し、共通の目標を達成するというチームの協力活動としての側面を、クラス活動以上に強く持っている。第3に、クラス活動とは異なるタイプの活動に深く従事することで、部活内の指導者（コーチ）及びメンバーとの間に、特別な人間関係が形成される場合がある（西島、2006）。

以上のような部活動の特徴から、学習指導要領でも、通常のクラス活動の結果として伸びると期待される能力とは異なる能力が、部活動によって伸びるのではないかと期待されている。そして、実証研究においても、部活動を行うことで学校での生活態度、教師への態度、学習意欲が向上し、自分の人生に対する充実感や学校に対する満足感も高まり、結果的に、より良い学校生活を送ることができるというポジティブな結果が全般的に示されている（e.g.、山口・岡本・中山、2004；角谷・無藤、2001）。

しかし、学校教育において、部活動は課外活動という位置づけのため、自主参加が基本となる。そのため、部活動に対してのコミットメントにも個人差があり、途中で休止する生徒も存在する。よって、部活動が生徒の心や体に及ぼす効果を実証的に検討していくと共に、生徒が部活動を途中休止する理由を明らかにし、活動の継続に寄与する要因を特定して行くことも必要になる。しかし、部活動経験の効果を検討する研究に比べ、部活動の活動維持に影響する要因を検討した研究は、量・質ともに十分とは言えない。そこで本論文では、部活動の継続意欲を高める要因を明らかにすることを研究1の目的とする。

*国際人間学研究科 心理学専攻

また、本論文では、研究2として、部活動経験の長期的な効果についても検討する。これまでに行われてきた研究では、部活動での経験を通して生徒が新たなものの見方や行動様式を獲得し、その結果、現在の学校生活にポジティブな効果が生じるという効果が示されている。しかし、部活動経験の中で生徒が獲得したものの見方や行動様式が、その後、大学に進学、あるいは社会に出た後にも利用可能な汎用的な能力であるのかという問題については、十分に検討が進んでいない。そこで本論文では、部活動経験の結果、日常生活で利用可能な汎用的なライフスキルが獲得されるのかという問題を明らかにすることを研究2の目的とする。

研究1

研究1では、部活動の生徒が部活動を途中休止する理由を明らかにすると共に、活動の継続に寄与する要因を検討した。

部活動を退部する理由について検討した先行研究は、ほとんどの場合、中学あるいは高等学校の運動部を対象に行われている。青木（1989）は、運動部に所属して中途退部した高校生を対象に、退部理由の検討を行っている。その結果、指導者・部員と上手くいかないといった「部内での人間関係の軋轢」が最も多く挙げられていた。稲地・千駄（1992）は、運動部に一時期所属した後、退部した中学生を対象に、退部理由の検討を行っている。その結果、キャプテンに統率力がなかったなどの「部の機能の低下」、部内で仲の良い友達がなくなったなどの「交友分離不安」、毎日が練習で休みがなかったなどの「拘束」などが主な退部要因として主に挙げられており、高校生の場合と同じく、人間関係に関わるトラブルが退部に関係してくる傾向が見られた。また、横田（2002）は、運動部に所属する高校1年生を1年6か月にわたって追跡調査し、選手のバーンアウト得点の変化と退部決意の関係を検討している。そして、退部前に選手のバーンアウト得点が急速に上昇、そのようなバーンアウト得点が増加する引き金として指導者との対立、部員同士の軋轢や確執が存在する可能性が示唆された。

このように、退部の決定には、指導者や他の部員との関係を含めた部内での対人ストレスが大きな要因になっていることがこれまでの研究から示されている。また、部活を辞めたいという行動に影響する要因ではなく、部活への満足感や適応感を高める要因を探る研究でも、部活動内での人間関係が重要な役割を果たすことが示されている。例えば、中村・繁田・有吉（2009）は、中学生から大学生の運動部員を対象に調査を行い、指導者から適切なサポートを受けているという認識が高い生徒ほど、部活動に対する適応感や達成動機が高いことを報告している。また、尼崎・清水（2008）は、高校野球部員を対象とした研究で、他の部員との関係が親密で、まとまりがあると認識しているほど、部活に対する適応感やチーム内での効力感が高いことを示している。

しかし、部活動の退部理由や活動維持に影響する要因を検討したこれらの先行研究には、いくつかの点で限界がある。第1に、文化部を対象にした研究がほとんど行われていない点である。第2に、部活動内での人間関係の測定方法が不十分な点である。これまでの研究の多くは指導者と

他の部員との関係をまとめて測定しているか、あるいは、指導者あるいは部員のどちらか一方のみの関係を測定している。しかし、指導者（コーチ）と部員は、部活動内で果たす役割が大きく異なることから、別々に測定し、それぞれの相対的な影響力を検討することが必要であると思われる。

そこで、以上で述べた2つの問題点を踏まえ、研究1では、大学生216名を対象に自由記述法を含む質問紙調査を行った。そして、以下の3点について検討を行った。第1に、運動部と文化部を含めて、部活動の退部理由（自由記述）をKJ法により分類した。また、実際には退部を思いとどまったが、部活動を辞めたいと思った経験について尋ね、その理由についても同じくKJ法により分類した。その結果、運動部と文化部を含めた検討によっても、先行研究と同様に、人間関係の軋轢を退部決定、あるいは退部願望の理由として挙げる人が多いという結果が追認された。

第2に、指導者および部員との人間関係の良好さが、運動部と文化部を含めた部活動の継続意欲に及ぼす影響を構造方程式モデリング（SEM）によって分析し、どちらとの関係が部活動の継続意欲にとってより重要かを検討した。さらに、運動部と文化部でパスの強さに違いがみられるかどうかを検討するために、多母集団同時分析を行った。なお、指導者及び部員との人間関係の良好さにおける指標としては、指導者および部員に対する好意度を使用した。その結果、指導者及び部員に対して好意を抱いている生徒ほど、退部願望を抱きにくいことが示された。このような影響関係は、運動部と文化部の両方で見られた。

第3に、自分との関係が良好だと認識される指導者及び部員がどのような特徴を備えているのかを探るために、指導者及び部員を好きな理由の自由記述をKJ法により分類した。その結果、指導者への好意を効果的に高めるためには、適切な指導と社会的に望ましい対人行動の遂行が必要であり、部員への好意を効果的に高めるためには、共有体験がポイントになることが示された。

研究2

研究2では、部活動内の人間関係のあり方に着目し、部活動の経験が、日常生活で利用可能な汎用的なスキルの向上に及ぼす影響について検討することを目的とした。

部活動の経験が生徒の満足感、効力感、学習意欲、他者への信頼感などを総合的に高め、その結果、現在の学校生活への適応が向上するという結果を示した先行研究は多い（e.g., 山口他、2004；角谷・無藤、2001）。そして、部活動内の経験の中でも、指導者から指導的サポートをもらったり、部員同士で積極的に関わり相互に理解しあったりするような対人経験を重ねることで、生徒のものの見方や行動様式が変化し、社会適応を向上させるという指摘が行われている（e.g., 中村他、2009）。

なお、部活動内での対人経験が、なぜ生徒のものの見方や行動様式の変化を促すかという問題については、経験学習論の立場から説明が可能である。このような経験を通じた学習は、学校で

の授業を離れた場でも生じ得るものであり、他者が多様な形で個人に働きかけ、支援を提供し、自立を促すことで個人の学習が促進される。そのため、自分の適性や興味・関心に基づきながら自らの能力および技能を磨く場として設定されている部活動においても、指導者や部員との共同的な関わりを通して、生徒のものの見方や行動様式に実質的な変化が生じ得る。

しかし、そのような部活動での対人経験を通して、その後、大学に進学、あるいは社会に出た後にも利用可能な汎用的な能力が獲得されているかという問題については、実証的な検討が十分に進んでいない。なお、部活動での対人経験によって伸びることが期待される汎用的なスキルとしては、時間や場所を超えて利用可能な日常生活スキル（ライフスキル）を挙げることができる。このライフスキルは、友人たちとの親密な関係を形成・維持するスキルである「親和性」、自分が所属する集団内での活動に積極的に関わっていきこうとするスキルである「リーダーシップ」、相手の気持ちへ感情移入するスキルである「感受性」、相手に対して好ましくない印象を与えないよう意識されたスキルである「対人マナー」の4つを含む対人スキルと、時間的展望と物事の優先順位を考慮した先見的なスキルである「計画性」と、情報を扱い、処理するスキルである「情報要約力」と、現在のありのままの自分を肯定的に捉えることができるスキルである「自尊心」と、落ち込んだ時や失敗した時、困難に遭遇した時でも前向きに考えるスキルである「前向きな思考」の4つを含む個人スキルで構成されている（島本・石井、2006）。この他にも、自己抑制や持続力、趣味活動への意欲などを汎用的スキルとして挙げることができる。なお、このような汎用的なスキルの獲得に影響する部活動での対人経験としては、先行研究の結果から、指導者から受けた指導内容（コーチング）と、部員との共有体験の2種類を挙げることができる（e.g., 古川、2011；須藤、2008）。

そして、以上で述べた点を踏まえ、研究2では、大学生209名を対象に質問紙調査を行った。そして、以下の2点について検討を行った。第1に、運動部と文化部を含めて、部活での指導者の指導方法および部員との共有関係が、日常生活で生涯にわたって利用可能な10種類の汎用的なスキルの獲得にどのように影響しているかを構造方程式モデリング分析によって検討した。その結果、指導者から受けた指導内容に関しては、会話をするとき部員と同じ立場に立って話してくれる、お互いの意見や提案を聞きあう雰囲気を作ってくれた、自分で判断し行動する機会をくれたなど、指導者が一方的に教え込むのではなく、生徒が持っている力を引き出すような「生活主体型指導」を行った場合、生徒の計画性、情報要約力、自尊心、持続的対処力といった、「個人スキル」が向上していた。つまり、部活動の中で、指導者が生徒主体型指導を行うことにより、生徒は、誘惑に抵抗し、自信を持って自律的に問題に取り組む力を身につける可能性が示されたと言える。

一方、目標を達成するために必要な知識や技術を備えさせてくれた、部員の目標をはっきりとイメージさせてくれた、一生懸命指導してくれた、部員のことを第一に考えてくれたなど、指導者自身が先頭に立って、熱心に指導を行うような「世話型指導」を行った場合、親和性や感受性と言った対人スキルや趣味活動への意欲は向上する一方で、持続的対処力は低下していた。つま

り、部活動の中で、指導者が世話型指導を行うことにより、生徒は、困ったときに人に相談したり、人の感情に敏感に反応したり、活動を楽しむ力は向上するが、誘惑に抵抗し自己制御する力は落ちる可能性が示唆されたと言える。このように、指導者の指導方法によって、生徒が獲得する汎用的スキルの種類には違いが見られた。

なお、部員との共有体験に関しては、情緒的で深いレベルの共有体験を核とする「親密性」は、生徒の汎用的スキルを全般的に向上させる可能性を持っていた。特に、対人スキルや持続的対処スキルへの影響が大きかった。一方、物品や感性の表面的な共有体験を核とする「類似性」は、生徒の汎用的スキルの一部（対人マナーと持続的対処）を下げており、共有体験の質が重要であることが示された。

総合的考察

本研究では2つの研究により、部活動での人間関係のあり方が、部活動の継続を促す上でも、総合的な生活スキルの獲得を促すうえでも重要な役割を果たすことが示された。今後は、縦断的にデータを取得して行くなどの試みを行うことにより、生涯にわたって個人の学習を支える汎用スキルの獲得に、部活動での人間関係のあり方がどのように影響するかという問題について、さらに実証研究を積み重ねて行くことが必要だろう。

引用文献

- 青木邦男（1989）．高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因 体育学研究、34、89-100.
- 古川久敬（2011）．組織心理学 培風館.
- 稲地裕昭・千駄忠至（1992）．中学生の運動部活動における退部に関する研究：退部因子の抽出と退部予測尺度の作成 体育学研究、37、55-68.
- 中村 仁・繁田 進・有吉正博（2009）．運動部活動におけるソーシャルサポートが適応感と達成動機に及ぼす影響 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系、61、121-127.
- 西島 央（2006）．部活動—その現状とこれからのあり方—、学事出版.
- 島本好平・石井源信（2006）．大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究、54、211-221.
- 角谷詩織・無藤 隆（2001）．部活動継続者にとっての中学校部活動の意義—充実感・学校との満足度との関わりにおいて— 心理学研究、72、79-86.
- 須藤春佳（2008）．前青年期の親しい同性友人関係“chumship”の心理学的意義について—発達の・臨床的観点からの検討— 京都大学大学院教育学研究紀要、54、626-638.
- 山口正二・岡本貴行・中山 洋（2004）．高等学校における部活動への参加と学校適応度との関連性に関する研究 カウンセリング研究、37、232-240.
- 横田匡俊（2002）．運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動 体育学研究、47、427-437.